

石仏あれこれ

シリーズB 石仏を考える

B2 仏教の成立

森隆一



苦行後の釈迦

(Wikipedia 釈迦より)

B2. 仏教の成立

インドは何処を指すのか。英領印度は現在のインド、パキスタン、バングラデシュ・スリランカから成っていたが独立時に3カ国に別れ、その後、バングラデシュが独立した。後に印パ戦争が起きたが、同じ国ならば、内戦であったかもしれない。内戦によりアフリカが疲弊していることを見れば、3カ国に別れたことはよかったことともいえる。アフリカの発展のためには、大きな部族を分離しない国境線を引き直すことが必要ではないかと思った。

仏教の立場から見れば、ガンダーラ(パキスタン)・バーミヤン(アフガニスタン)はインドの外になる。これらを、分けて考えることは煩雑さが増すと考える。もともと、仏教の成立時には、このような国境はなかった。また、古代においては明白な国境などはなく、国も生滅を繰り返してきた。

インドにアフガニスタン(バーミヤン)を加えるのは無理があるかもしれないが、ここまでを(大)インドとして扱っていくつもりである。

2.1. 仏教以前

インドの歴史(時代)は、BC15C(3500年ほど前)頃にアーリア人がインドに移住し、BC1000年ごろにはガンジス川中流に移動し、インド・アーリア族による王国ができた、という話から始まる。その前にインダス文明があるが、その後のインドとの関係は無いとされている。

中国では、周王朝が紀元前1046年(3050年ほど前)頃から、紀元前256年(2300年ほど前)まで続いたとされるから、その前の殷王朝の時期に当たる。

3000年ほど前に歴史上大きな流れがあったことになる。まず思い浮かぶのは縄文海進である。

‘正史を彷徨う’で引用したWikipedia「縄文海進」では、

最終氷期の最寒冷期後(19,000年前)から始まった温暖化にともなう海水準上昇を指す。日本では縄文時代の始まり(16,000年前)に近い。海水準上昇は約120メートルにおよんだ(年速1-2cm)。ピーク時である約6,500年-約6,000年前まで上昇が続いた。現在は日本ではピーク時から海水準は約5メートル低下した。

ということから、3000年前の海水面は、均等に上昇しているとすれば、半分の2.5mということになる。

次は、地理院地図でのユーラシア大陸である。

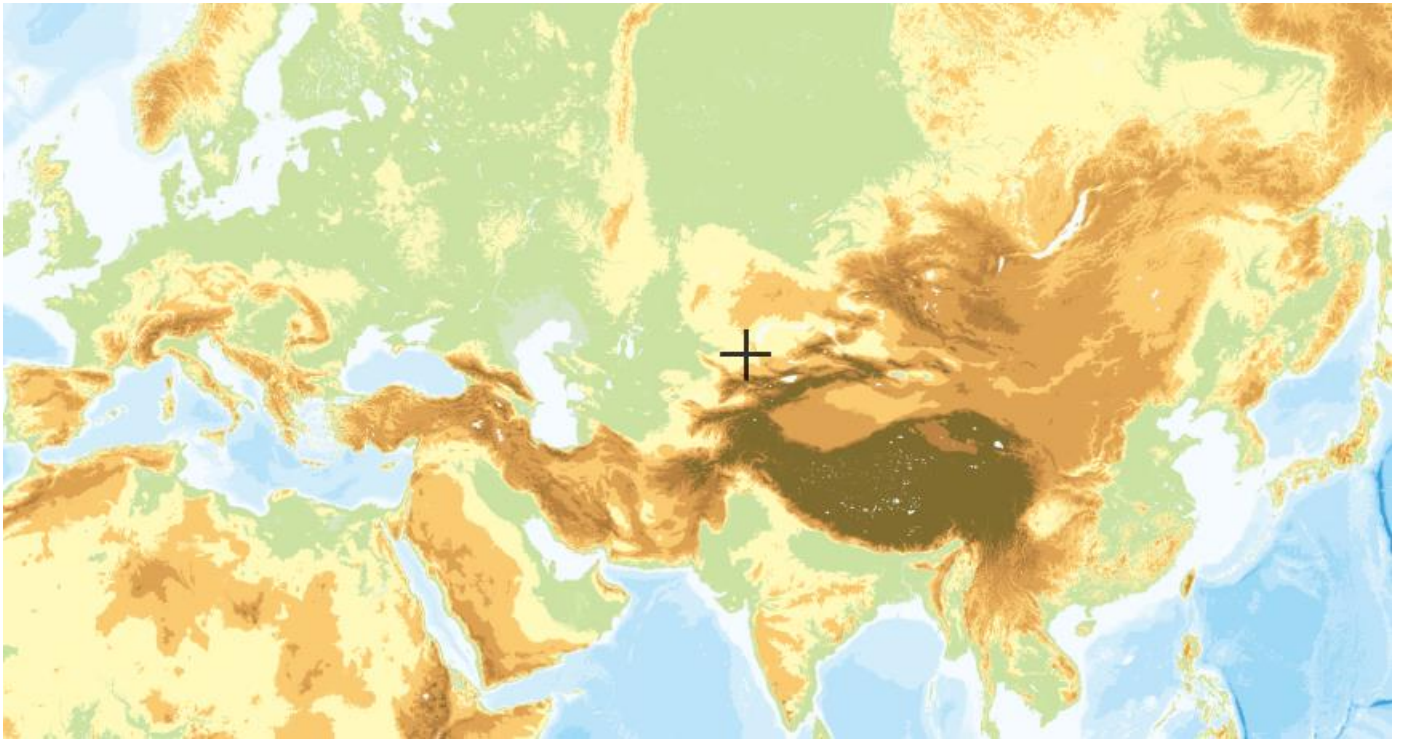


図 B2.1 ユーラシアの地勢（国土地理院地図）

‘正史を彷徨う’では、地理院地図で標高を調べた。

図 B2.1 で、緑が殆ど無いのは、日本・トルコ・ギリシャ・イタリア南部である。朝鮮半島は若干微妙である。

図 B2.1 の色分けに関する記述を探したが、見つけれなかった。かわりに、「自分で作る色分け標高地図」というページを見つけた。ここでは、等高線の値を指定することにより、7つの部分を色分けた地勢図を作成できる。これを試用して作成したのが以下の地勢図である。

ここでは色が凡例のようにでていない。地名表示を残しているため、この地図の色が影響しているのではないかと思っている。そのせいか位置と縮尺によりいろは微妙に変わっている。中央下部にある‘十’は、この位置の標高が下部に表示される。

また、凡例の位置は地理院地図のウィンドウの任意の位置に移動できる。

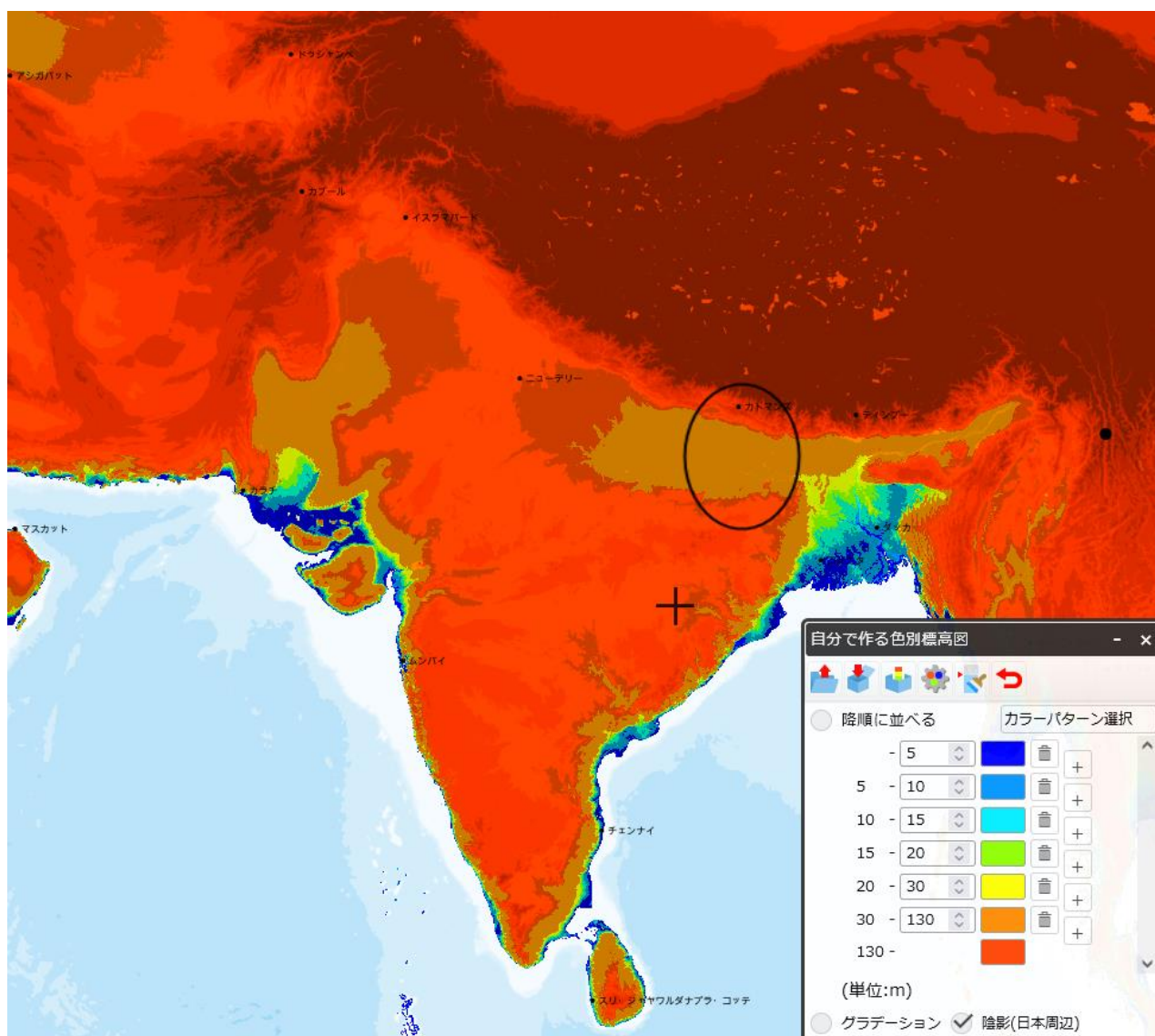


図 B2.2 縄文海進(6000 前)とインド

図 B2.2 で初期仏教遺跡(釈迦に関するもの)は図の楕円の辺りにある。左の青色の上辺りにはインダス文明の遺跡モヘンジョダロがある。Google Map の地図と比べると、図では黄緑に近い黄色の部分と、ベージュに近いオレンジ色の境(標高 30m)辺りに位置している。

Wikipedia「モヘンジョダロ」では、紀元前 2500 年から紀元前 1800 年にかけて繁栄したという。(2000 を足せば、4500 年前から 3800 年前ということになる。) 縄文海進のピーク時である約 6,000 年前より 1500 年程後のことになる。

ここで、基礎知識を得るために、思いついた幾つかのキー・ワードを Wikipedia の記事から、抜き取り引用していくことにする。

私の人生論「[アーリア人の大移動](#)」

アーリア人はインド・ヨーロッパ語族に属する言語を話し、紀元前 1500 年頃、中央アジアからインドやイランに移住した古代民族です。

現代のヨーロッパやアジアの多くの民族と文化的共通性をもち、中央アジアの草原地帯で遊牧生活を営んでいましたが、紀元前 2000 年頃、「寒冷化」が原因で、馬と戦車をもって、南はインド亜大陸、西は中央ヨーロッパ、東は支那西部まで大移動を開始しました。

”高貴(=”アーリア”の意味)な民族”と自称したアーリア人は、紀元前 1500 年頃、ヒンドークシュ山脈にあるカイバー(カイバル)峠を越えて、南へ移住しパンジャーブ地方に侵入し、先住農民を征服、農耕・牧畜生活を営み、インド人として氏族ごとに村落を形成しました。

前 15 世紀以降にイラン集団(イラン・アーリア人)が拡大し、その後は西方にも

移動してヨーロッパ人になります。

ここでは、B.C. 1500 年頃にパンジャーブ地方に侵入し、B.C. 1000 年頃にガンジス河流域に進出したことが極めて重要です。

Wikipedia 「インド・アーリア人」

インド・アーリア人は、インド・アーリア語派の言語を用いる人々の総称。古代においては、狩猟と牧畜によって生計を立て、飼育する動物の中では馬に最も重要な役割を置いていた。彼らが異なる文化の周辺民族との関わり合いの中から作り出したリグ・ヴェーダを中心とした文献から、その動態が考察されてきた。

リグ・ヴェーダには、インド亜大陸の河川の名が頻繁に言及されており、中でもシンドウ川(インダス川)とサラスヴァティー川(不明)は言及される数が多く、重要である。インド・アーリア人が勃興した地は‘七つの川の地’と呼ばれており、現在のアフガニスタン東部からパンジャーブ、インドのウッタル・プラデーシュ州西部であると推測されている。

その興隆に伴って他の定住民との争いがあり、特にダーサおよびダスユとの争いが激しかったことが窺われる。ダーサは主要部族とは異なる先にこの地に移住していたアーリア人と考えられており、比較的穏便な対処がなされた。リグ・ヴェーダには、シャンバラという者がバラタ族のディヴォーダーサと争って敗れたことが述べられているが、族の者にダーサという名がついていたことが知られる。これに対してダスユは、徹底的に征伐する対象と考えられていたようである。

バラタ族がガンジス川流域へ移住したという 3000 年は、ピーク時である約 6,000 年前までより 3000 年程後のことである。

Wikipedia 「インドの歴史」

前期ヴェーダ時代： 移住後、バラタ族・トリツ族など諸部族の間で戦争が勃発した(十王戦争)。バラタ族の社会は、いくつかの部族集団によって構成されていた。部族を率いたものをラージャンと称し、ラージャンの統制下で戦争などが遂行された。ラージャンの地位は世襲されることが多かったが、部族の構成員からの支持を前提としており、その権力は専制的なものではなかったとされる。

バラタ族は、軍事力において先住民を圧倒する一方で、先住民から農耕文化の諸技術を学んだ。こうして、前期ヴェーダ時代後半には、牧畜生活から農耕生活への移行が進んでいった。また、バラタ族と先住民族のプール族の混血も進んでいった(クル族の誕生)。リグ・ヴェーダにおいて、先住民に由来する発音が用いられていることも、こうした裏付けになっている。彼らの神々への讃歌と祭式をまとめたものがヴェーダである。司祭者バラモンがヴェーダの神々をまつり、ここにヴェーダの宗教が初期バラモン教としてインド化していった。

後期ヴェーダ時代とガンジス文明： 紀元前 1000 年(3000 年前)頃より、バラタ族はガンジス川流域へと移動した。そして、この地に定着して本格的な農耕社会を形成した。農耕技術の発展と余剰生産物の発生にともない、徐々に商工業の発展も見

られるようになり、諸勢力が台頭して十六大国が興亡を繰り返す時代へと突入した。マハーバーラタによると、紀元前 950 年頃にクル族の子孫であるカウラヴァ王家が内部分裂し、クルクシェートラの戦い(英語版)でパンチャーラ国に敗北して衰退していった。こうした中で、祭司階級であるバラモンがその絶対的地位を失い、戦争や商工業に深く関わるクシャトリヤ・ヴァイシャの社会的な地位上昇がもたらされた。十六大国のうち、とりわけマガダ国とコーサラ国が二大勢力として強勢であった。十六大国のひとつに数えられたガンダーラは、紀元前 6 世紀後半にアケメネス朝のダレイオス I 世のインド遠征によって支配されるようになり、他のインドの国々から切り離されアフガニスタンの歴史を歩み始めることになった。

ウパニシャッド哲学と新宗教： 紀元前 5 世紀になると、4 大ヴェーダが完成し、バラモン教が宗教として完成した。ガンジス川流域で諸国の抗争が続く中でバラモンが凋落すると、それに代わりクシャトリヤやヴァイシャが勢力を伸ばすようになった。こうした変化を背景にウパニシャッド哲学がおこり、その影響下にマハーヴィーラによってジャイナ教が、マツカリ・ゴースーラによってアーjeeヴィカ教が、釈迦によって初期仏教が、それぞれ創始され当時のインド四大宗教はほぼ同時期にそろって誕生し、六師外道とも呼称された自由思想家たちが活躍した。

世界史の窓「[鉄器／鉄製農具](#)」

インドではアーリヤ人のガンジス川流域への移住が行われた前 1000 年頃から始まる後期ヴェーダ時代に、青銅器に代わって鉄器が用いられるようになり、また大麦か

ら小麦や稲作中心の農業に変化してきた。鉄器は農耕具とともに武具としても使われた。そのような社会の変化の中で、ヴェーダ信仰も儀式や祭祀を重視する傾向が強まり、それにもなって司祭であるバラモンが特権的な地位を占めるようになってきた。

3000 年前以前にこの地に移住していたインド・アーリヤ人いたようだ。

ジャイナ教も仏教と同じころに成立した。遅れてヒンドゥー教も現れた。

Wikipedia 「ジャイナ教」

ジャイナ教は、マハーヴィーラ(ヴァルダマーナ、前6世紀-前5世紀)を祖師と仰ぎ、特にアヒンサー(不害)の禁戒を厳守するなど徹底した苦行・禁欲主義をもって知られるインドの宗教。ジナ教とも呼ばれる。仏教と異なりインド以外の地にはほとんど伝わらなかったが、その国内に深く根を下ろして、およそ2500年の長い期間にわたりインド文化の諸方面に影響を与え続け、今日もなおわずかだが無視できない信徒数を保っている。

Wikipedia 「ヒンドゥー教」

ヒンドゥー教は、インドやネパールで多数派を占める民族宗教、またはインド的伝統を指す。西欧で作られた用語である。ヒンドゥー教徒の数はインド国内で10億人、その他の国の信者を合わせると約11億人以上とされ、キリスト教、イスラム教に続いて、人口の上で世界で第3番目の宗教である。

この三教の間の宗教戦争に関する記事は見えない。アジャンターでは三教の石窟が共存している。仏教とジャイナ教は友好的であったようだ。

アーリア人がインド侵入した時期 3000 年前から 2500 年間までの間に
図 B2. 2 で橢円の周辺までが開墾されたと考える。

この海退に伴う耕作地の拡大に伴い、豊かになり、大きな国が出来てきた。大きな国が出来るということは、その領内は安全に通行できることから、スタッタのような豪商が出現したと考えられる。

彼らの援助と仏教教団を維持できるだけの経済的基盤が出来たように思われる。東南アジアで見られるように、僧侶の生活は寄進により成り立っていたようである。

仏教は、釈迦(ゴータマ・シッタッタ)により、紀元前 500 年頃に始められた。その後、ガンジス川中流域を布教した。この頃は、仏像はなかった。

仏像は寺院に祭られ、インダス川上流地帯が発祥の地である。

釈迦はバラモン教に替わる宗教を提唱したのであろうか。

とりあえず、おおよそ紀元 500 年までのインドと西アジアの大まかな年表を作成してみた。

インド・アーリヤ人の移住にアッシリア・ヒッタイトが関係しているの

だろうか。例えば、その勢力拡大による玉突き現象。

表 B2.1 年表 西アジアとインド

西アジア	インド
初期アッシリア	
BC20C-BC15C 古アッシリア	BC15C- インド・アーリア人
BC17C 古ヒッタイト	
BC14C-BC10C 中アッシリア	BC10C アーリア人のガンジス川流域への移住
BC10C-BC7C 新アッシリア	
BC6C-BC4C アケメネス朝ペルシア	BC6C辺り 釈迦誕生
BC327-326 アレクサンドロス インド遠征	入滅後 第1回結集
BC8C-BC3C スキタイ(ウクライナ)	
BC3C-BC1C グレコ・バクトリア王国	BC317-BC180 マウリア朝
BC247-228 パルティア(ペルシャ)	BC268-BC232 アショーカ王
	入滅後200 第3回結集 サーンチー
	BC2C グントウパッリ石窟
	BC2C バージェャー石窟
	BC1C-2C アジャンタ前期
	この頃仏像
	2C 竜樹(般若経・華嚴経・中論)
	1C-3C クシャーナ朝
226-651 ササン朝ペルシア	2C半ば カニシカ1世
5C-6C バーミアン	5C後-6C アジャンタ後期
	5C-10C エローラ

2.2. 釈迦

まずは、Wikipedia「釈迦」の冒頭を簡単に見ていく。

釈迦は釈迦牟尼の略である。釈迦は彼の部族名もしくは国名で、牟尼は聖者・修行者の意味。つまり釈迦牟尼は、釈迦族の聖者という意味の尊称である。十六大国時代の一つコーサラ国の部族・小国シャーキャの出身であり、シャーキャの都であり釈迦の故郷はカピラヴァストゥである。ネパール中南部のティロリコートや北インドのネパール国境近くウッタル・プラデーシュ州バスティ県のピプラーワーの両遺跡がカピラヴァストゥと推定されている。

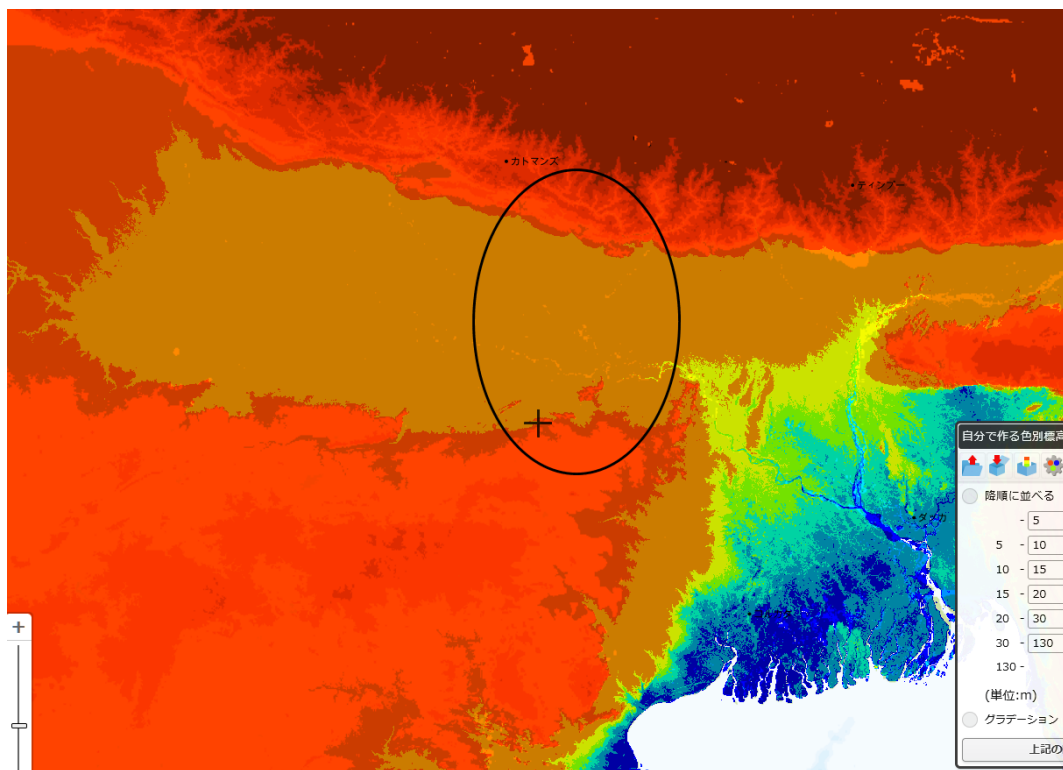


図 B2.3 縄文海進(6000 前)とガンジス川中下流

図 B2.3 は図 B2.2 の楕円を含む部分を拡大したものである。

[宗恩寺のホームページ](#) > 「釈尊の生涯」に次の地図が掲載されていた

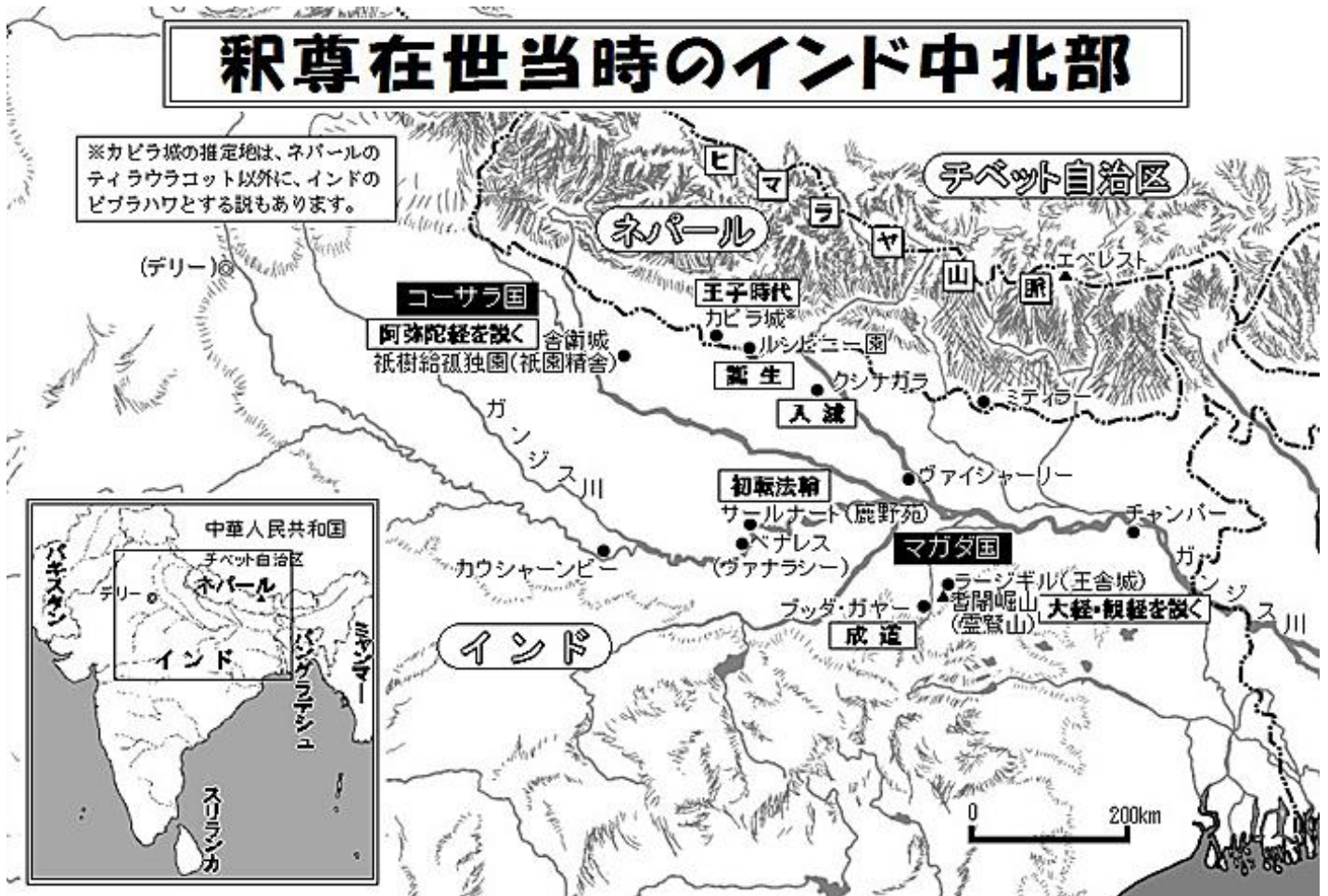


図 B2.4 5 世紀のインド中北部

図 B2.4 に書き込まれている枠で囲まれた地名のうちコーサラ国以外は、図 B2.3 の楕円内に含まれている。

Wikipedia で釈迦の足跡を調べると、

小国シャーキャの都カピラヴァストゥで生まれた(カピラ城)。

ルンビニ*(藍毘尼)はネパールの南部タライ平原にある小さな村の名。

ブッダガヤ*(仏陀伽耶(成道所))で覺りを得た。

サールナート*で初めて説法を行った。(鹿野苑(初転法輪(初説法)所))

ガンジス川中流域(東西に流れている部分)を布教して回った。

クシーナガラ*(拘尸那揭羅(涅槃所))で没した。

である。このうち、*を付けた4ヶ所が四大聖地とされている。

これに次の4つを加えたものが八大聖地とされている。

ラージギール(王舎城)布教の地

サハート・マハート(祇園精舎・舎衛城) 教団本部の地

ヴァイシャリ(毘舎離城) 最後の旅の地

サンカーシャ(僧伽舎) 昇天の地

このほかに、天竺五精舎もある。

竹林精舎、祇園精舎、菴羅樹園精舎、大林精舎、靈鷲精舎

である。構成は幾つかの説があるようだ。また、‘○○五山’の始まりということである。

次の地図は、神谷武夫とインドの建築 > [「インドのユネスコ世界遺産」](#)にあったもの(現在は更新されていた)に図 B2.3 の対応部分を並べてみたものである。

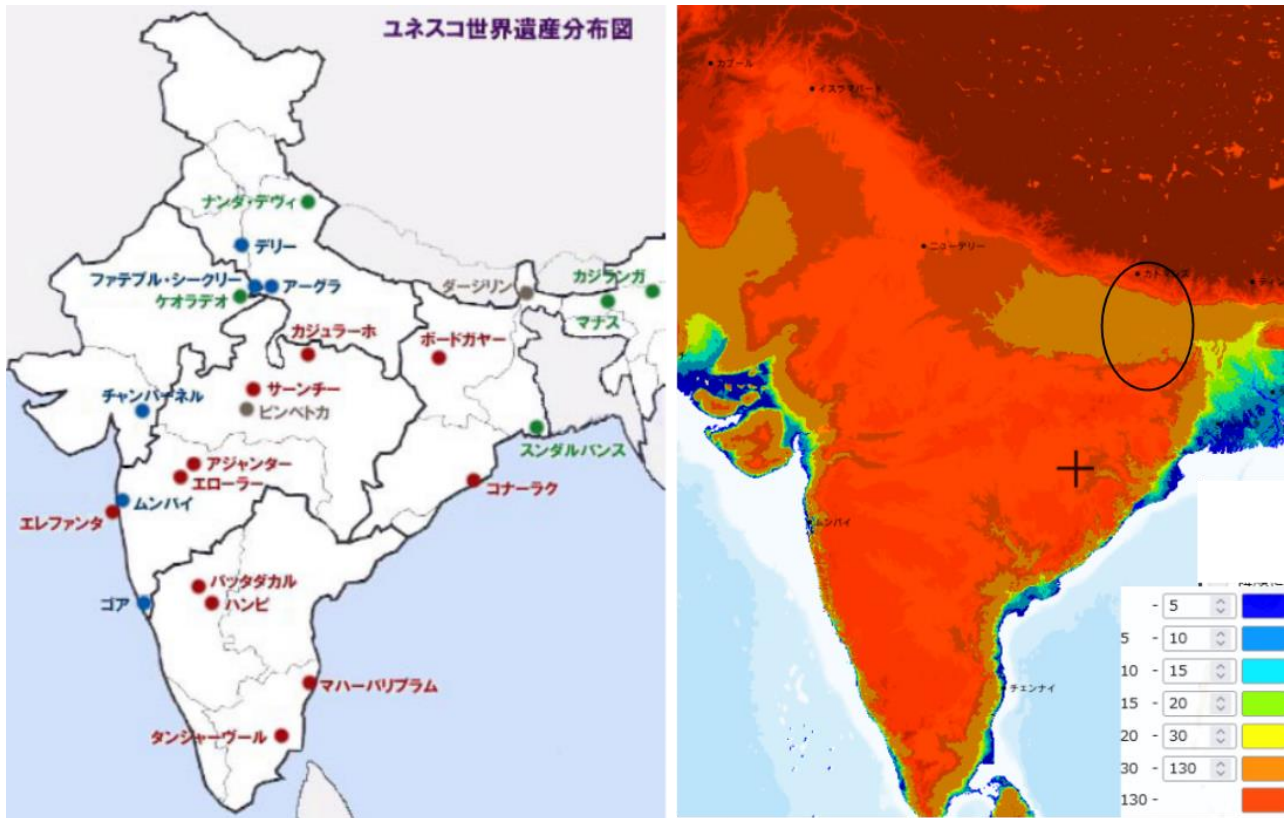


図 B2.5 ネスコ遺産分布と地勢

聖地の写真が多数掲載されているウェブ・サイトを挙げておく。予想していたことだが、10年程の間にかかなりのサイトが閲覧できなくなっていた。予想はしていたが、対策はしていなかった。対策としては、意味ありそうな記事を保存しておくことだが、これは、データの管理が適切でなければ、効果は減少する。

大信寺>住職閑話「[インド仏教聖地巡礼の旅](#)」

南アジアへの招待>PHOTO GALLERY>仏教美術>PHOTO GALLERY>「[仏教の聖地](#)」

インド ing>「[インド仏教聖地](#)」

仏教は釈迦の教え(教典)とそれをまもって生きていくこと、あるいは、

そのような人々を指す。経典は、あるとき弟子または帰依者の質問にこう答えたという形式である。

キリスト教ではキリストは神の教えを伝えたことになっている。聖書でもキリストはこう言ったという同様の形式のようだ。これらでは経典は釈迦・孔子・キリストが書いたのではなく、弟子が話を記録したと思われる。イスラム教では神がその教えをマホメッドによって伝えたということである。儒教は孔子が語ったこととなっている。語ったことは考えたことと解釈できる。

仏教の成立したのは何をもって言うのだろうか。教義と教団の成立であろうか。%% イマイチ

2.3. 初期寺院

図 B2.4 に書かれている地名について、少し調べてみた。

まず、マガダ国の都は王舎城(ラージャグリハ)で、現在のパトナ(パーティプトラ)から 100km ほど離れている。ここから、西北西に流れているのがガンジス河で、北北西に流れているのがブラフマプトラ川で、ガンジス川は、ここより西が中流域、東が下流域となっている。

左やや上のデリーは中流域とされている。ここより北は上流域で、デリーはガンジス川が平原に流れ出るところとなる。

コーサラ国は現在のインドのウッタル・プラデーシュ州に相当し、都はアヨーディヤーから、十六大国時代(紀元前 6~5 世紀)にはシュラーヴァステイー(舎衛城)になった。後に、コーサラ国は隣国のマガダ国に併合された。

纏めきれない 2 つの記事をそのまま引用する。

1 つは、Wikipedia「マガダ国」の記事で、

そして、この時期のマガダ王の中でも特に名の知られているのは釈迦にまつわる説話でも登場するビンビサーラ王やアジャータシャトル王であり、隣国アンガ国の征服などを通じてマガダ国の勢力が大きく拡大した。この頃の首都は、ラージャグリハ(王舎城)であった。この都には竹林精舎があった。そして、近くには霊鷲山があ

る。ウダーイン王は首都をガンジス川沿いのパタリプトラ(華氏城)へ移転させた。後に、この街はマガダ国の首都として全インドの中心都市として栄えることになる。現在のビハール州の州都パटनाである。

続いてシシュナーガ(英語版)王によってシシュナーガ朝が建てられたが、この王朝も仏教系の文献などで非常に重要視される。その後もマガダ国は周辺の大小の国々を次々と征服、従属させていき紀元前4世紀に成立したナンダ朝、そしてその後を受けたマウリヤ朝のチャンドラグプタ(旃陀羅堀(掘)多)の孫アショーカ王(阿育王)の時代にはインド亜大陸のほぼ全域を支配するまでになった。

もう一つは、Wikipedia「コーサラ国」の記事で、

仏教経典のマッジマ・ニカーヤ(中阿含経)には、ゴータマ・ブッダがコーサラ国の者であること(コーサラ国が、ゴータマ・ブッダの出身と信じられている釈迦族を属国としていたこと)、ジャイナ教において24番目(にして最後)のティールタンカラ(祖師)であるマハーヴィーラがコーサラで説法をしたことが述べられている。マハーコーサラ王の時代に、近隣のカーシー国を征服・併合した。マハーコーサラ王の後を継いだのがプラセーナジット王であり、ゴータマ・ブッダを信奉していた。プラセーナジット王が不在の間、大臣のディーガ・チャラヤナが息子のヴィドゥーダバを王位につけた。それから遠からず、コーサラ王国は隣国のマガダ国に併合された。

仏教寺院はどのようなものであったろうか。

Wikipedia「寺院」では、

寺院(vihara)は、仏像が祀られ、仏教の出家者が起居し、修行を行う施設である。寺、仏閣ともいう。寺院の建造物は、礼拝の対象を祀る堂塔と、僧衆が居住する僧坊とに区分される。堂塔は、釈迦もしくは仏陀の墓を指すものであって、祖形は土饅頭型であったが、暑さを避けるために傘を差し掛けたものが定着して、中国などで堂塔となった。僧坊は、インドではヴィハーラと名づけられて、僧侶が宿泊する場所であり、祇園精舎のように釈迦在世の時代から寄進された土地を指したが、次第に僧坊が建設されたり、石窟に住んだりした。中国に入ると僧坊が建設されることが多くなり、堂塔が併設されたので、寺院というと、堂塔と僧坊が同所にあることが普通となる。

最初期の出家者の一時的定住地は āvāsa(住处)または ārāma(園)と呼ばれた。都市郊外の土地が僧伽に寄進されたものを僧伽藍摩(samghārāma)・僧伽藍、略して伽藍といわれた。出家者の定住化に伴って僧院が形成された。精舎(vihara)・平覆屋・殿楼・楼房・窟院の5種がある。精舎や窟院では広間と房室を中心として諸施設が整備された。

まず、仏像は紀元前後にガンダーラで出現したということから、初期仏教には(上の意味での)寺院では無かったことになる。また、現在の`お寺`は本堂と庫裏から成るものが多くこれらが寺院となるかどうかは微妙である。

初期の仏教施設は、出家者(僧)が住むところ僧房のみであるとされてい

るが、説法所や修行する場所も設けられていたられたはずである。むしろ、こちらが先ではなかったかと思われる。イメージとしては、礼拝施設を取り除いた修道院や禅寺の小さいものを想定している。

Wikipedia「伽藍」では、

伽藍は saMghaaraama の音写で、僧伽藍摩・僧伽藍が略されて伽藍と言われた。

インドでは、礼拝の対象を祀る仏塔と僧衆が居住する僧房とは、その発生起源を異にするが、後世になって僧院は仏塔を受容した。後期の僧院では、礼拝の対象(塔または仏像)を安置した祠堂の他に、中央の中庭を囲んで房室を持つ方形の精舎が流行した。精舎の付帯施設として、会堂・食堂・台所・貯蔵室・流し場・便所が設けられている。

サンガは僧伽と漢訳されている。もとは、集団や組合を意味するサンスクリット語で、政治史の領域では古代インドの一部の国に見られた政治形態・統治形態、国の形態を示すための用語として用いられており、専制王をもたず集会で選出された首長が行政権を持つ、一種の共和制のことで、英語では republic と訳す。

上述のサンガのひとつであるシャーキャ出身のガウタマ・シッダールタが仏教を布教してからは、samgha サンガは仏教修行者の集団も指すようになった。

Wikipedia「毘舍離」では、

リッチャヴィ族(離車族)の住んでいた地域で、自治制・共和制がしかれ、通商貿易

が盛んで、自由を尊ぶ精神的雰囲気があったと言われている。

釈迦の時代においてもよく知られた商業都市であり、仏典にも数多くその名が見られる。また、仏教教団自体にも強い影響を与えており、仏教僧団を意味するサンガ(僧伽)という言葉は、元々はこの地域に発生した商工業者の同業組合や共和制を意味する言葉であり、その仕組みを仏教教団側が採用したことから、仏教僧団がこの名で呼ばれるようになった。

初期仏教教団における特異な在家信徒(後に出家)である遊女アンバパーリーが住んでいたことや、仏教経典の第2回結集が行われたことで有名。

八大聖地をもう一度並べてみる。

ルンビニー*	生誕の地	藍毘尼
ブッダガヤ*	成道(悟り)の地。	仏陀伽邪
サールナート*	初転法輪(初めての説教)の地	鹿野苑
ラージャグリハ	布教の地	王舎城
サハート・マハート	教団本部の地	祇園精舎
ヴァイシャリ	最後の旅の地	毘舍離城
クシナガラ	涅槃(死)の地	拘尸那揭羅
サンカーシャ*	昇天の地	僧伽舎

生誕の地と成道の地は仏教成立の前のことであるから、後に造られない限り、仏教寺院はない。釈迦生存時から伽藍が形成されたこととしては

教団本部の地とされている祇園精舎が第1候補であろう。

精舎には天竺五精舎とよばれるものがあり、これは、竹林精舎・祇園精舎・菴羅樹園精舎・大林精舎・靈鷲精舎とされている。

Wikipedia「精舎」では、

精舎(Vihāra)とは、仏教の比丘(出家修行者)が住する修道施設、寺院、僧院のこと、また、その異名。精舎とは、精行者の所居なるをいう。



図 B2.6 祇園精舎 (Wikipedia 祇園精舎 より)

図 B2.6 祇園精舎は、教団本部とされているところで、レンガを10段ほど積んだように見える。これがレンガ部分の全部とすれば、壁ならば低すぎるので、基礎か基壇と思われる。説法の場所はともかく、居住用の区画には、壁と屋根があったはずであり、これらは木で造られていたのではないかと思っている。



図 B2.7 クシナガラ 涅槃堂の周り（大信寺ホーム・ページ）

図 B2.7 のクシナガラの塀の高さは人の高さに近いように見える。また、上端部は整っていない。

神谷武夫「[インドの木造建築](#)」では、

古代インドでは木材が豊富だったので木造建築が主流でしたが、しだいに乾燥化が進んで 木材が減少し、中世以後のインド建築は石造建築の歴史となってしまいました。しかし今も木造文化圏に属する地域があり、興味深い木造寺院やモスクがあります。このディヴィジョンでは インド各地の木造建築の伝統と特性を紹介していきます。

これからは、初期においてはレンガの部分が基礎で、上は木で造られた

ことが推定できる。時代が下がるとともに木の部分が減っていった。木に代わるものとしては、レンガのほかに日干しレンガや土壁が考えられる。日干しレンガの耐久性はどの程度のものか、特に、上の遺跡の写真にあるような、天の部分はどうか。日干しレンガは、土さえ手に入れば、あとは手作業で出来ることから、日干しレンガの耐久性は考古学クラブのテーマに成り得るものと思っている。南西アジアやアフリカでは日干しレンガは現在でも使用されている材料である。いいかえれば、乾燥地帯では、一定期間の使用には耐え得るものといえる。

本当かどうかはわからないが、“エジプトでアスワン・ハイ・ダム建設後、ナイル川沿岸の湿度が上がり、スフィンクスの風化が進んだ”という話を読んだことを覚えている。ガンジス川の近くでは、南部の高原地帯と比べて湿度はかなり高いと考えられる。

遺跡の発掘後は、風化はかなりの速さで進んだことが考えられる。壊れた部分を破棄して、整えたのではないかということも考えられる。また、祇園精舎のレンガは日干しレンガではない気がする。内部の建物に囲まれたところでは、低い基壇のあずまや風のものもあったかもしれない。祇園精舎に関しては、発掘後修復が行われ、この際に焼結レンガに変えられ、高さも低くされたと考える。

Wikipedia「祇園精舎」‘ジェータの寄付’の話は面白いので引用する。

ある日、スダッタは、釈迦の説法を聞いてこれに帰依し、彼に説法のための寺院(精舎)を寄付しようと思いついた。以前の仏教教団は一年中歩きまわって布教・托鉢などの修行(遊行)を行っていたが、雨季での遊行は虫や植物などを多く踏みつけて殺生してしまうため、雨季だけは建物内で修行するようになっていた(安居)が、教団にふさわしい施設を欠いていたからである。

そして見つかった土地が、ジェータ太子の所有する園林であった。その土地の譲渡を望むスダッタに対して、ジェータ太子が「必要な土地の表面を金貨で敷き詰めたら譲ってやろう」と戯れで言った。しかし、スダッタが本当に金貨を敷き詰め始めたため、ジェータ太子は驚いて、そのまま土地を譲渡し更に自らも樹木を寄付して、寺院建設を援助した。一方で増谷によれば、スダッタが土地の取引を求めた際ジェータ太子がそれを強く拒否したため、スダッタは大臣に仲裁を求めたが、その結果「(黄金を敷き詰めるという言葉によって)太子が既に土地の価格を定めたので土地は売却されなければならない」との裁定が下り、スダッタは土地に黄金を敷き詰めて買収したという。

そのため、この僧園はジェータ太子と給孤独者スダッタ両者の名を冠して祇樹給孤独園と呼ばれ、そこに建てられた精舎を「ジェータ太子の森(漢訳で「祇陀樹」、略して「祇樹」、身寄りのない者に施しをする長者(漢訳で「給孤独長者」、略して「給孤独」)の園林(園)にある精舎」と呼び、漢訳では「祇樹給孤独園精舎」、略して「祇園精舎」と称するようになった。

図 B2.4 でコーサラ国(舎衛城・祇園精舎)はほかと離れて、ガンジス川中流域の真中あたりにある。ここに「必要な土地の表面を金貨で敷き詰められる」富豪が出現し、釈迦を援助したということである。

2.4 縄文海進と古代文明

図 B2.2 のインド西部に青い部分が見られる。ここに四大文明の一つであるインダス文明のモヘンジョダロ遺跡や原っぱ遺跡がある。この話は大きなもので、筆者には立ち入る余裕はない。地勢地図を作成し、感想程度の文を添えることにする。

本題の前に、文明と文化という用語に興味をもった。学術用語で困ったときは、英語を調べるとかかることが多い。Weblio 和英辞書では、文明は civilization、文化は civilization; culture となっていて、研究社 新和英中辞典での「文化」の英訳として引用している用例は culture のみである。文明と呼ばれるには(巨大)石造遺跡群と(古代)帝国の存在および文字の存在などが必要と思われる。

インダス文明については馴染みが薄いですが、Wikipedia「インダス文明」では次のように書かれている。

初期食料生産期は紀元前 7000 年から紀元前 5500 年で、土器をともしない新石器時代である。領域形成期は紀元前 5500 年から紀元前 2600 年で、銅器時代後期である。統合期は紀元前 2600 年から紀元前 1900 年までで、狭義のインダス文明はこの統合期を指し、ハラッパー IIIA 期、ハラッパー IIIB 期、ハラッパー IIIC 期の三期に区分される。



図 B2.8 インダス文明諸都市の分布 (Wikipedia インダス文明より)

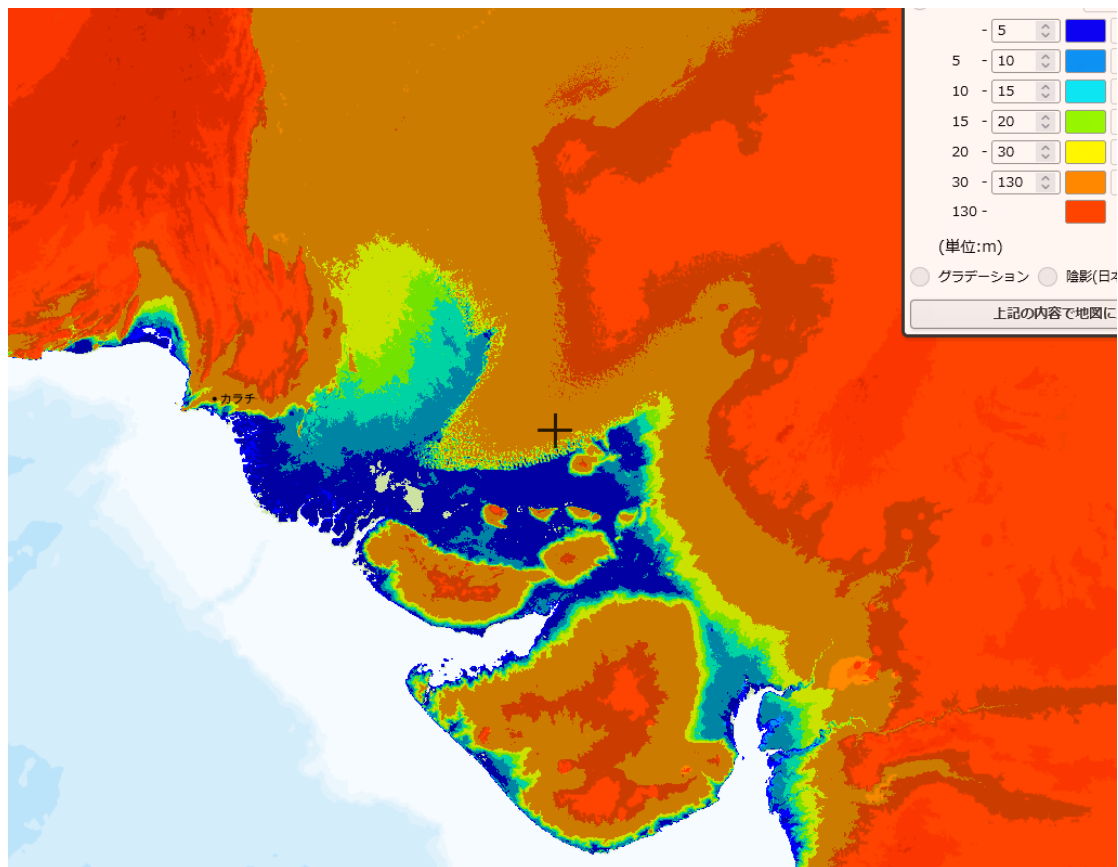


図 B2.9 インダス川下流

図 B2.8 と図 B2.9 から、モヘンジョダロは図 B2.9 の中央付近にある緑と黄緑の部分とベージュ色の部分の境界辺りにあったと思われる。また、ハラッパ遺跡は右斜め上図の上辺中央辺りベージュ色の部分と思われる。ベージュ色の部分は標高 30m から 130m で縄文海進期には樹で覆われていた山地と思われる。この地帯では、樹木に覆われた山塊あるいは独立高山などの麓では伏流水が湧き出すところもあり、居住地として適している。

Wikipedia「インダス文明」は、ハラッパ遺跡領域形成期から統合期にわたって長期間使用されたと書かれている。さらに、次のようにも書かれている。

インダス文明の衰退や滅亡については次砂漠化説・河流変化説・気候変動説・アーリア人侵入説のような諸説がある。

インダス文明の言語は原ドラヴィダ語に属すると推定されている。

インダス文字は現在でも解明されていない。統計的分析ができる長文や、ロゼッタ・ストーンのように多言語併記の物が出土しないことが研究の大きな障壁になっている。一方で、インダス式紋章は文字ではないという説もあり、論争が続いている。

他の三カ所の地勢も見ていく。次の図 B2.10 は、メソポタミア文明とエジプト文明で、それ其 5500 年前からと 5000 年前からである。両者は、モ

ヘンジョダロと同様に、図では黄緑に近い黄色の部分と、ベージュに近いオレンジ色の境(標高 30m)辺りに位置していると思われる。

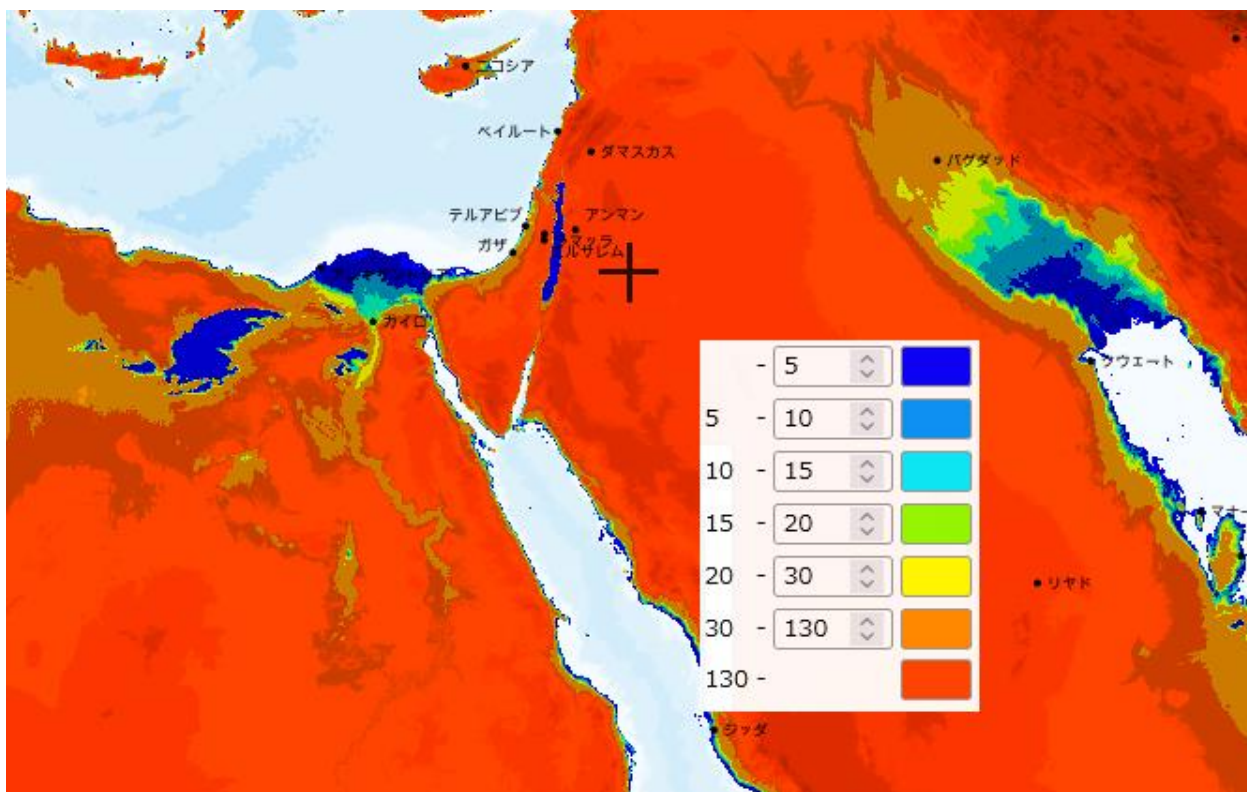


図 B2.10 縄文海進と中近東

図 B2.11 は遺跡の分布図で、図 B2.12 は下流域を拡大したもので、‘+’の右下に書かれているのは‘バクダット’である。

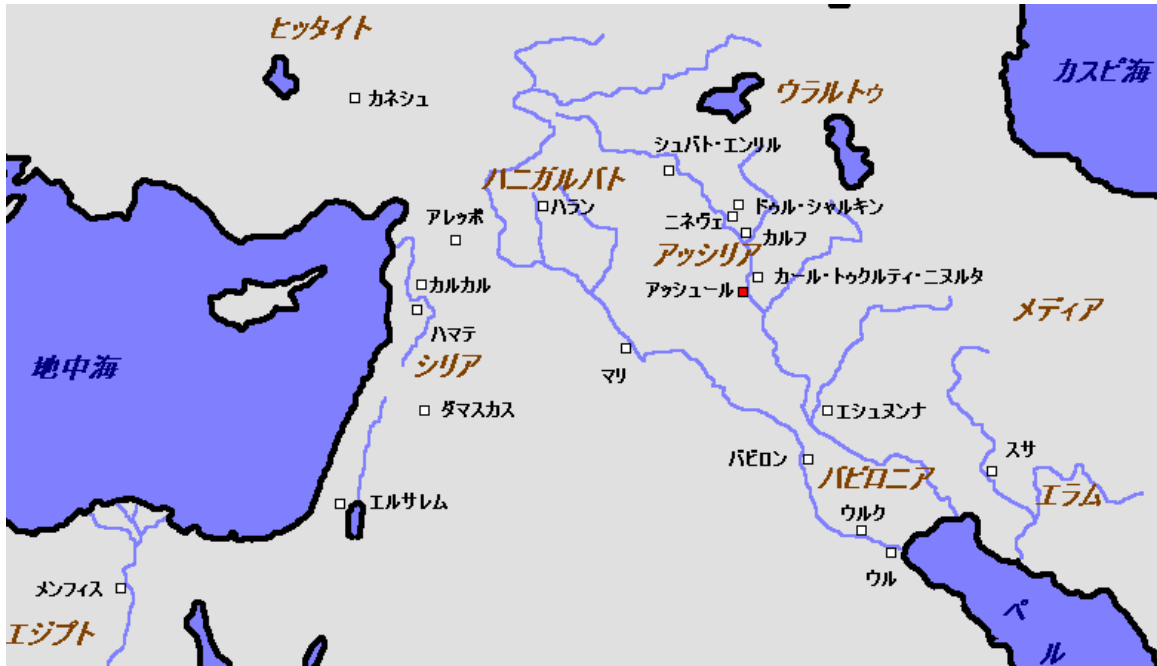


図 B2.11 メソポタミア遺跡分布 (Wikipedia メソポタミア文明)

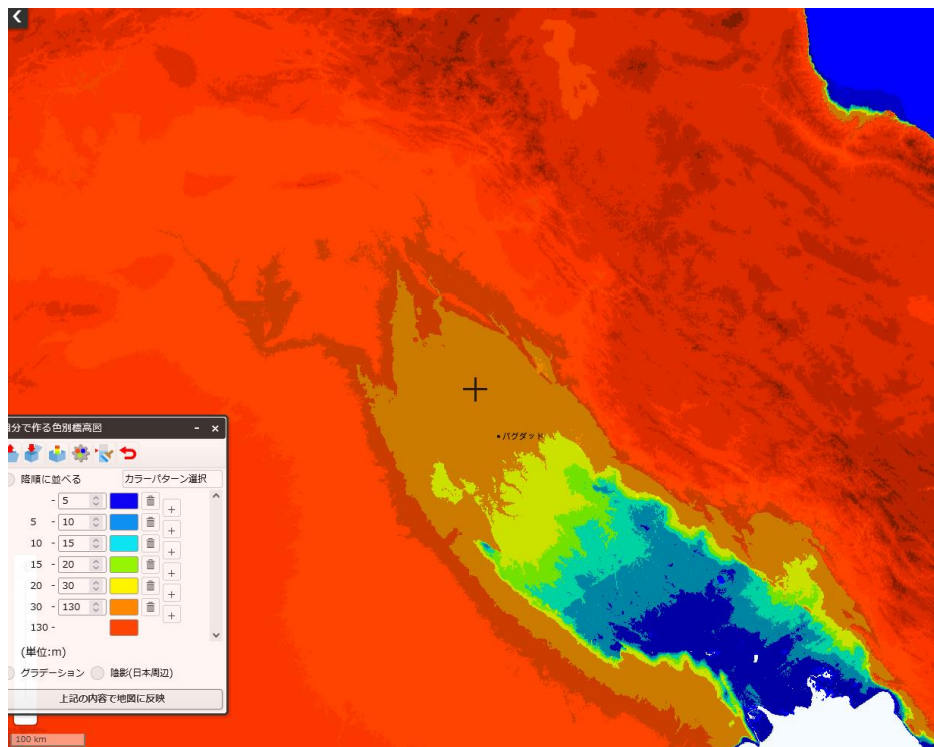


図 B2.12 ティグリス・ユーフラテス中下流

ティグリス・ユーフラテス川流域も、かつては、森林におおわれていたということである。

Wikipedia「レバノンスギ」では、

レバノンスギは、マツ科ヒマラヤスギ属の針葉樹である。同じヒマラヤスギ属のヒマラヤスギと同様、名前に「スギ」が付いているがマツ科である。なおスギは同目ではあるもののスギ科（または広義のヒノキ科）スギ属であり、近縁ではない。レバノンの国旗にはこの木が採用されている

レバノン、シリアなどの高地が原産。高さは 40m ほど。古代においては中近東一帯に広く自生していたが伐採利用が大規模に進んだ結果、レバノンスギの森は消滅し現在においてはレバノン等のごく一部の地域に小規模に残存するのみとなり、保護扱いされている。

良質の木材であり、古代エジプトやメソポタミアのころから建材や船材に利用されていた。レバノンに住んでいたフェニキア人はこの木を伐ってガレー船建造や木材・樹脂輸出を行い、全地中海へと進出した。

現在わずかにレバノンスギが残存するカディーシャ渓谷と神の杉の森は世界遺産に登録されている。

環境省＞自然環境・生物多様性＞砂漠化対策＞[「砂漠化する地球」](#)では、

砂漠化とは

砂漠化は、砂漠化対処条約で「乾燥地域、半乾燥地域及び乾燥半湿潤地域における

種々の要因（気候の変動及び人間活動を含む。）による土地の劣化」と定義されています。土地の劣化は世界中のどこでも発生する可能性がありますが、乾燥地における土地劣化を砂漠化とよんでいます。

砂漠化の原因

砂漠化の原因として、『気候的要因』と『人為的要因』の二つが挙げられます。

「気候的要因」：地球的規模での気候変動、干ばつ、乾燥化など。

「人為的要因」：乾燥地の脆弱な生態系の中で、その許容限度を超えて行われる人間活動。例えば、農地の拡大、家畜による過放牧、都市の拡大、インフラ開発、鉱山開発などの持続不可能な土地管理が主な要因です。こうした人為的な要因は、人口増加、土地所有の変化、移住、消費需要の増加、市場経済の進展、貧困などのために生じると考えられています。

ティグリス・ユーフラテス川の中下流はガンジス川の中下流とよく似ているが、ベージュ色の部分がガンジス川のほうが数倍大きい。ガンジス川流域が砂漠化しなかったのは北にそびえるヒマラヤ山脈によるものと想われる。

砂漠化の原因として思いつくものを具体的に挙げてみる。

「気候的要因」としては取り挙げることのできるのは海退であろう。海退が現在まで平均して進んだとすれば、3000年前は6000年前の半分程度になる。図 B2.10 あるいは図 B2.12 で青い部分の半分程度が陸地化したこ

とになる。

「人為的要因」としては、森林伐採と、遊牧による草原の焼失が考えられる。

図 B2.13 はナイル川中下流の古代の地名で、図 B2.14 はこの地域の地勢図である。図 B2.13 に書かれた地名は、図 B2.14 の緑と黄緑の地域に位置していると思われる。なお、ナイル川河口は綺麗な扇状地を成している。



図 B2.13 紀元前 15 世紀における古代エジプトの最大版図(Wikipedia エジプト文明)

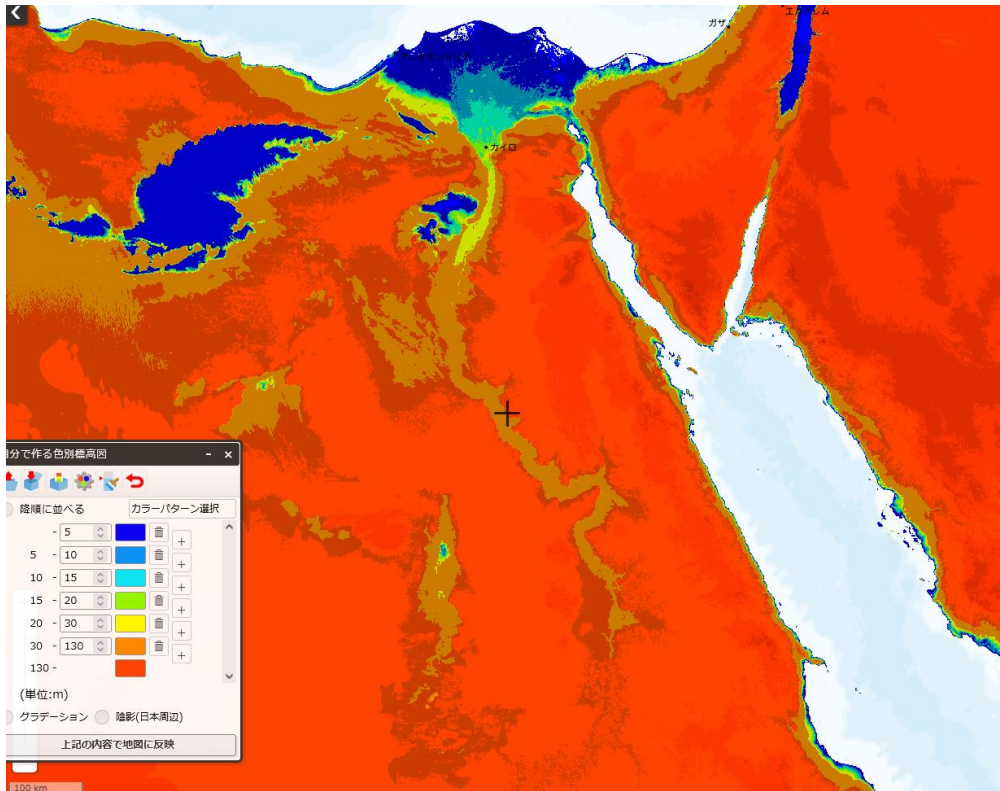


図 B2.14 ナイル川中下流

次の図は残る中国のもので、図を見てまず目につくのが青の部分が広いことである。

‘+’と右下隅の中間辺りの白い所が太湖である。太湖のすぐ東に蘇州で、太湖の下の楔形の湾の奥が杭州である。‘江浙実れば天下足る’あるいは‘蘇杭熟すれば天下足る’はこの辺りである。蘇杭を蘇広とするものもあるが、広州は位置的にそぐわないと思う。

また、太湖の少し左上の揚子江北岸に揚州、その左少しに南京がある。三国志(演義)で、魏の曹操と戦った後の孫権の居城は南京にあった。

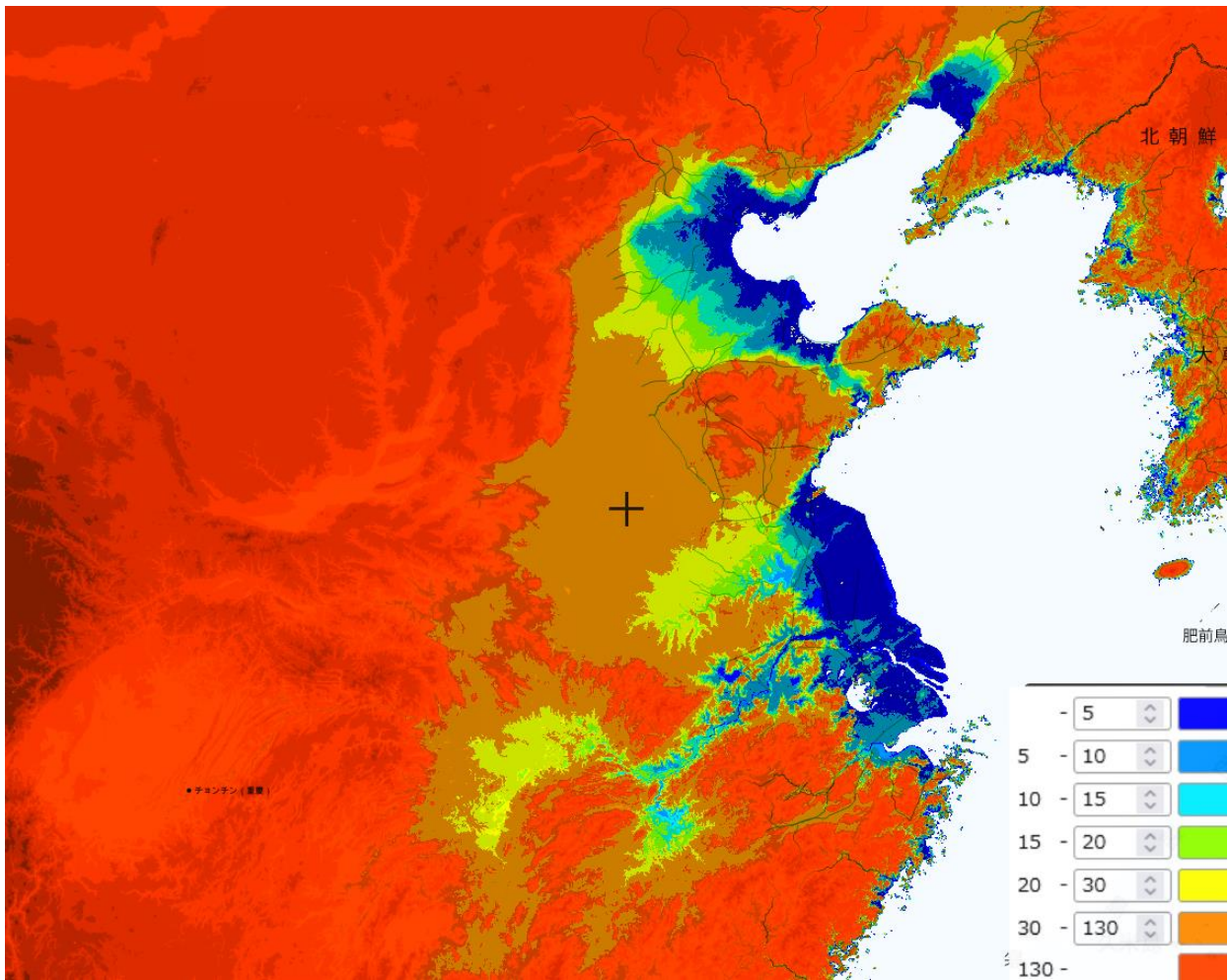


図 B2.15 縄文海進と中国

揚州には日本に渡るまで鑑真が滞在した大明寺がある。

Wikipedia「用修士」では次のように書かれている。

揚子江を中心に、北は淮水から南は南嶺山脈までの地域のことである。現在の江蘇省全体よりも広く、江南の広大な地域をも含んでおり、魏晋南北朝においては、全国一の重要な地位を占める地域であった。

揚州は北に徐州、豫州と接し、西は荊州、南は交州に接していた。揚州は三国時代、

呉の孫策・孫権によって支配された土地である。揚州は南部が山岳地帯であるために、人も物資も北部に集中した。このため、三国時代の呉では戦争が相次いで人口不足に陥り、兵力が減少して国が滅亡する一因を成した。しかし揚州は中国南部の要衝地帯であり、晋滅亡後に建国された東晋は、揚州を本拠地としている。

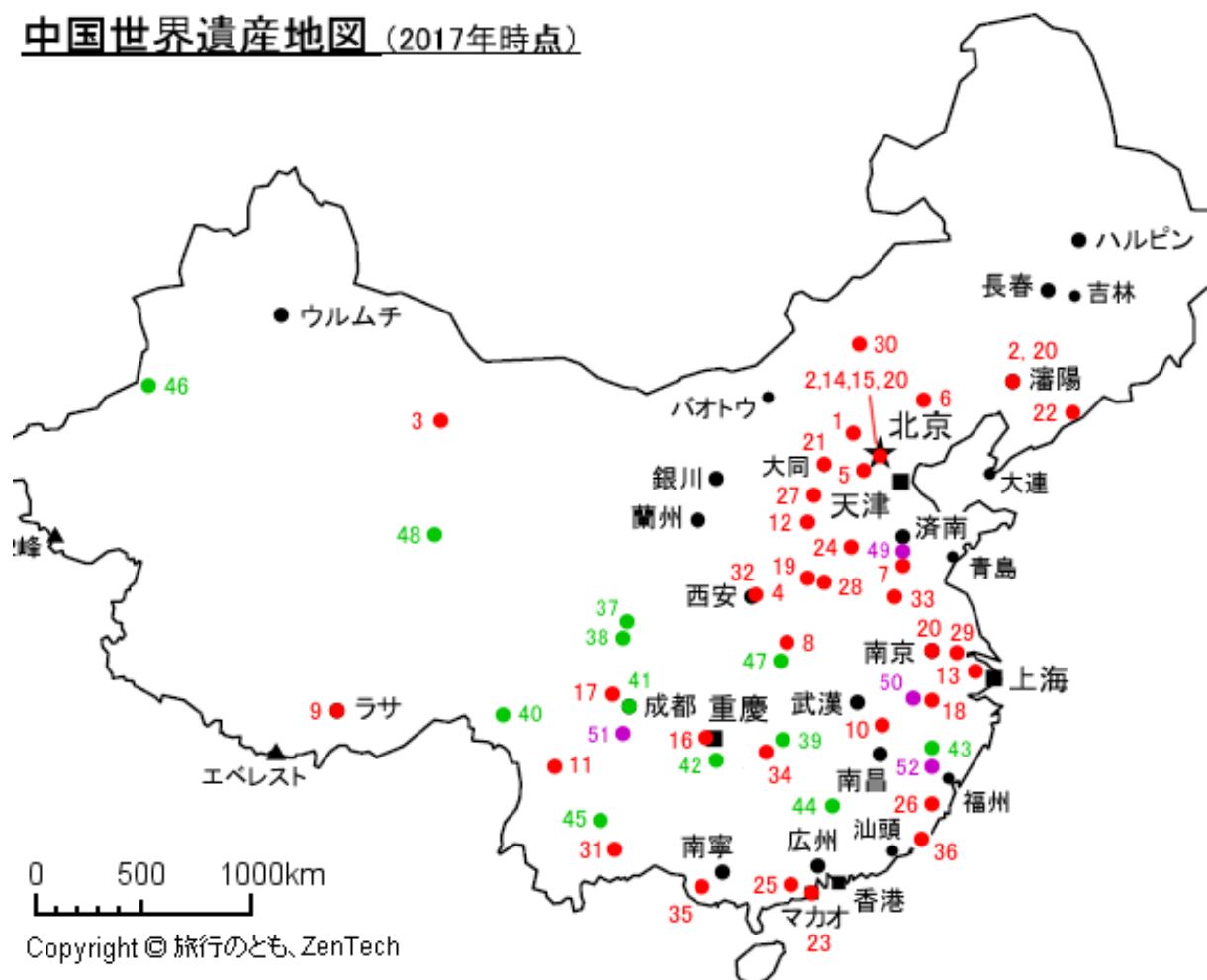
隋の煬帝が開削させた大運河により物資の集積地となり、一躍繁栄することとなる。また、煬帝が再三行幸を行い、遊蕩に耽ったため、亡国に至った都市としても知られている。

唐代にはアラブ人やペルシャ人が訪れて、すでに国際港としての位置づけになって交易が発展したが、安史の乱(755-763)の混乱で、760年に田神功がペルシア人やイスラム商人を虐殺する揚州大虐殺が起こり、アラブ人やペルシャ人との貿易の中心は泉州や広州に移った。

明代以降は、現在の江蘇省の東部を中心とした塩田からとれる塩の集積地としても重要な位置をしめ、この地に豪商を産み、文化の花を開かせる基礎となった。明末期の清・南明戦争では1645年に80万人が犠牲者となった揚州大虐殺が起こった。

清代の揚州八怪を初めとする、文人を多く輩出しており、揚劇や書画、盆景、料理といった、中国文化の上でも重要な位置を占める。

中国世界遺産地図 (2017年時点)



文化遺産

1. 万里の長城
2. 北京と瀋陽の明・清王朝皇宮
3. 莫高窟
4. 秦始皇帝陵
5. 周口店の北京原人遺跡
6. 承德避暑山荘と外八廟
7. 曲阜の孔廟、孔林、孔府
8. 武当山古建築
9. ラサのポタラ宮の歴史的遺跡群
10. 廬山
11. 麗江古城
12. 平遥古城
13. 蘇州古典園林
14. 頤和園
15. 天壇
16. 大足石刻
17. 青城山と都江堰
18. 安徽省南部の古代集落群-西通と宏村

19. 龍門石窟
20. 明・清王朝の皇帝墓群
21. 雲崗石窟
22. 高句麗前期の都城と古墳
23. マカオ歴史地区
24. 殷墟
25. 開平樓閣と村落
26. 福建土楼
27. 五台山
28. 天地の中央にある登封の史跡群
29. 杭州西湖の文化的景観
30. 上都遺跡
31. 紅河哈尼梯田群の文化的景観
32. シルクロード:
長安/天山回廊の交易路網
33. 大運河
34. 土司遺跡群
35. 左江花山の岩絵の文化的景観
36. 歴史的共同租界、鼓浪嶼

自然遺産

37. 九寨溝
38. 黄龍風景区
39. 武陵源
40. 三江併流
41. 四川省のジャイアントパンダ保護区
42. 中国南方カルスト
43. 三清山国立公園
44. 中国丹霞
45. 澄江の化石産地
46. 新疆天山
47. 湖北神農架
48. 青海可可西里

複合遺産

49. 泰山
50. 黄山
51. 峨眉山と楽山大仏
52. 武夷山

図 B2.16 中国の世界遺産

(旅行のとも Zen Tech > 「中国の世界遺産地図」 「」より)

夏殷周の年代を揚げておく。

夏 4000 -3600

殷 3600-3000 (bc17c-bc1046) (太行山脈の東南麓)

周 3000-2250 前(bc1046-bc256)

Wikipedia「黄河文明」では次が書かれている。

裴李崗文化（紀元前 7000 年？～紀元前 5000 年？）の代表遺跡は河南省新鄭県裴李崗。円形・方形の竪穴建物に暮らし、粟といった畑作農業が行われていた。艶出した紅褐色の陶器や磨製石器などを特色とする。

老官台文化（紀元前 6000 年？～紀元前 5000 年？）の代表遺跡は陝西省華県の老官台遺跡。円形の竪穴建物に暮らし、粟作といった畑作農業が行われていた。暗紅色の夾砂陶を特色とする[2]。

北辛文化（紀元前 6000 年？～紀元前 5000 年？）の代表遺跡は山東省滕県官橋鎮北辛村。黄褐色の陶器を特色とする。

磁山文化（紀元前 6000 年？～紀元前 5000 年？）の代表遺跡は河北省武安県磁山。円形・楕円形の竪穴建物に暮らし、粟作といった畑作農業が行われていた。紅褐色の夾砂陶を特色とする。

仰韶文化（紀元前 4800 年？～紀元前 2500 年？）は 1921 年、河南省澗池県仰韶村で発見された彩陶（赤地に彩色した土器）を特色とする文化。前期（紀元前 4800 年ころ）は紅陶が主流で、代表遺跡は陝西省西安市半坡、仰韶半坡類型文化と称されている。母系制で、農村の階層化がみられる。前 4000 年頃にろくろの使用が見られる仰韶廟底溝類型文化が現れた。後期（紀元前 3500 年以降）は、半坡後期類型・西王村類型・大司空類型・秦王寨類型の四種の文化に大別され、この頃には貧富の差がみられ、社会の分業・階層化が進んだ。

後岡文化（紀元前 5000 年？～紀元前 4000 年？）の代表遺跡は河南省安陽市後岡。北辛文化を継承して発展した。

大汶口文化（紀元前 4300 年？～紀元前 2400 年？）は 1959 年、山東省寧陽県磁窯鎮堡頭村で遺跡が始めて発見された。のちに山東省泰安市大汶口でも遺跡が発見されて、こちらが代表遺跡となった。前期は紅陶が主流だったが、後期には黒陶・灰陶が主流となった。後期の卵殻黒陶の高柄杯は、精巧で美しく、山東龍山文化に受け継がれた。

龍山文化（紀元前 2500 年？～紀元前 2000 年？）は中国中央研究院歴史語言研究所によって 1930 年、山東省章丘県龍山鎮で発見された黒陶（黒色土器）や灰陶を特

色とする文化。黒陶は薄手で精巧に作られた黒色の土器で、製作にはロクロが使用されていた。焼成温度は約 1000 度以上。後期には銅器の鑄造も行なっていた。中原龍山文化（陝西龍山文化・晋南豫西龍山文化・河南龍山文化）と山東龍山文化とに分かれる。中原龍山文化は仰韶後期文化を継承し、灰陶が主流。骨を灼いてひび割れを見る占卜もこの頃始まったとされている。山東龍山文化は大汶口文化を継承しており、黒陶が主流。

二里头文化（紀元前 2000 年？～紀元前 1600 年？）は 1959 年、河南省偃師県二里头で発見された。遺跡は約二キロ四方で、中心部には二つの宮殿跡がある。この遺跡の人々は、晋南豫西龍山文化・河南龍山文化を継承し、青銅鑄造の技術を持っていたと考えられている。

閉鎖された Yahoo! ジオシティーズにあった「東アジア歴史地図」で得た地図を 2 つ掲げる。1 つは 3100 年前 (bc12c) の中国で、殷の滅亡から周の勃興の時期に当たる。封神演義は、西遊記的な内容であるが、この時期を扱ったものである。西遊記でもある僧侶が仏典を求めて天竺に行くという大筋は変わっていない。封神演義の主人公は太公望で、殷を滅ぼす先遣部隊司令官で、殷討伐後はさらに東方の齊の国を興した。

殷のほうは東方の制圧を担当していた人物(聞仲、太師(軍師))とその軍隊が主力である。

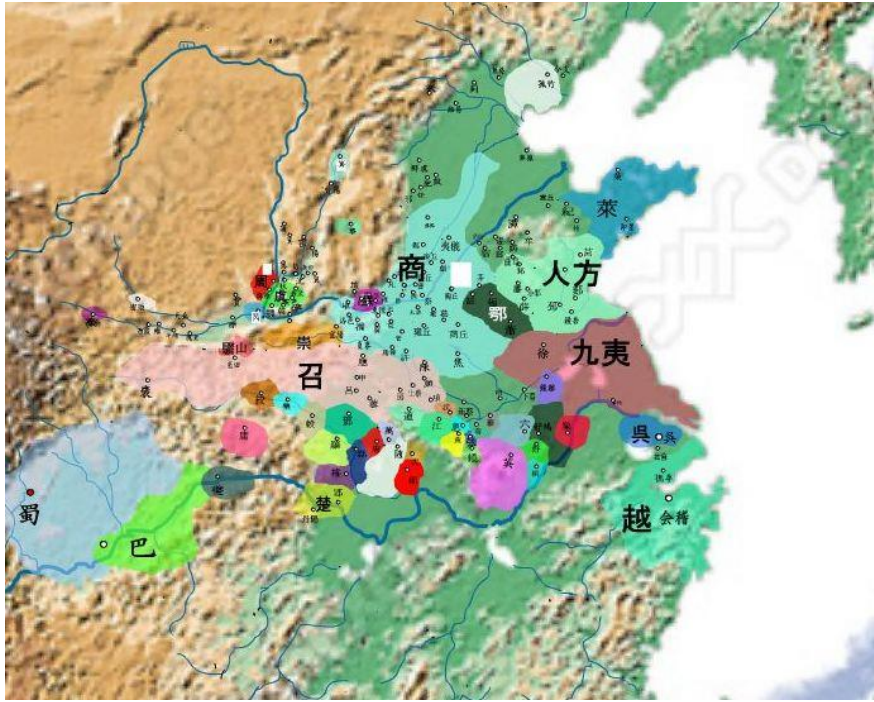


図 B2. 17 3100 年前(bc12c)の中国

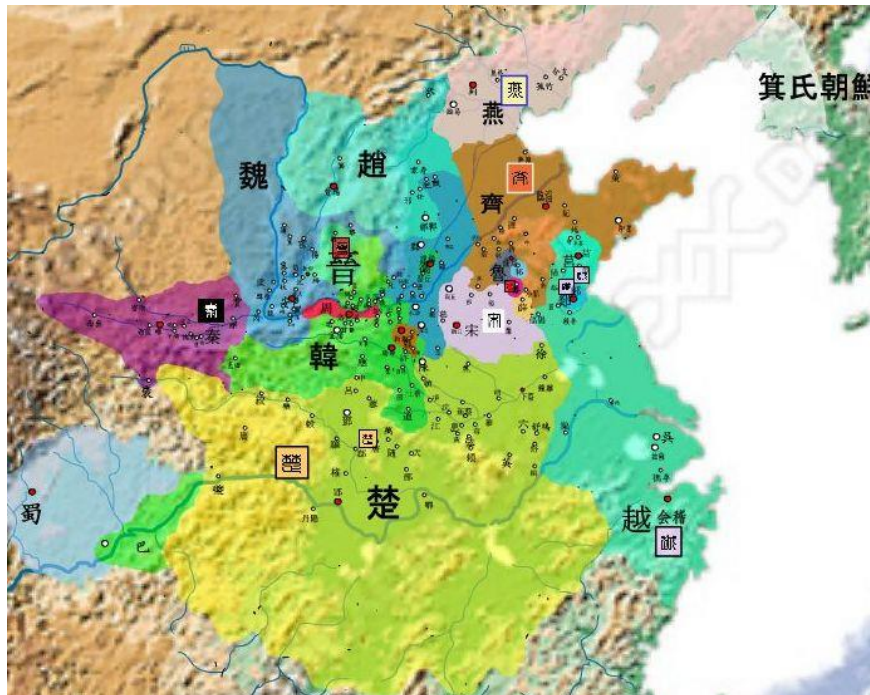


図 B2. 18 2400 年前(bc5c)の中国

もう一つは、2400年前(bc5c)の中国で、戦国時代の初期で秦がまだ小国の時代と思われる。山東半島の左下に魯の国があり、この100年ほど前に孔子(bc550頃-bc79)がいた。

なお図 B2.17 で、商と書かれているのが殷で、周はその左黄河が北上する部分の西岸に小さく書かれている。大きな字で書かれているのは商・召・人方・九夷・越で、中くらいの字で書かれているのは蜀・巴・楚・崇・莱・鄆?・呉(他2字が不鮮明)である。

これらが上で挙げた諸文化と関係づけられるのか不明である。

さらには、長江文明もある。Wikipedia「長江文明」から引用する。

長江文明は、中国長江流域で起こった複数の古代文明の総称。黄河文明と共に中国文明の代表とされる。文明の時期として紀元前14000年ごろから紀元前1000年ごろまでが範囲に入る。後の楚・呉・越などの祖になっていると考えられる。

20世紀前半に黄河文明の仰韶文化が発見されて以来、黄河流域で多くの遺跡が見つかったことで中国の文明の発祥は黄河流域であり、その後次第に長江流域といった周辺地域に広がっていったとの見方が支配的であった。

しかし1973年・1978年の発掘調査で発見された浙江省余姚県の河姆渡遺跡により、この説は覆される。河姆渡遺跡は紀元前6000年から紀元前5000年ごろのものと推定され、大量の稲モミなどの稲作の痕跡が発見された。稲作を行っていた事からその住居は高床建物であった。このように河姆渡遺跡は明らかに黄河文明とは系統

の異なるものであり、それまでの「中国文明すなわち黄河文明」という当時の定説を大きく覆す事になった。

更に、東北の遼河周辺でも文明の痕跡が発見されるに至り、現在では遼河周辺、黄河上・中・下流域、長江上・中・下流域に分類し、それぞれが互いに影響しあい、かつ独自の発展を遂げていったと考えられている。

長江文明

玉蟾岩遺跡： 湖南省道県。紀元前 14000 年？ - 紀元前 12000 年？ のものとされる。

稲モミが見つかったが、栽培したものかは確定できない。

仙人洞・吊桶環遺跡： 江西省万年県。紀元前 12000 年？ 栽培した稲が見つかり、それまで他から伝播してきたと考えられていた中国の農耕が中国独自でかつ最も古いものの一つだと確かめられた。

彭頭山文化： 湖南省澧県彭頭山遺跡を代表とする。紀元前 7000 年？ - 紀元前 5000 年？ 散播農法が行われており、中国に於ける最古の水稲とされる。

大溪文化： 重慶市巫山県大溪遺跡を代表とする。紀元前 4500 年？ - 紀元前 3300 年？ 彩文紅陶（紋様を付けた紅い土器）が特徴で、後期には黒陶・灰陶が登場。灌漑農法が確立され、住居地が水の補給のための水辺から大規模に農耕を行う事の出来る平野部へ移動した。

屈家嶺文化： 湖北省京山県屈家嶺遺跡。紀元前 3000 年？ - 紀元前 2500 年？ 大溪文化を引き継いで、轆轤を使用した黒陶が特徴。河南地方の黄河文明にも影響を与えたと考えられる。

石家河文化： 屈家嶺文化から発展し、湖北省天門県石家河に大規模な都城を作った紀元前 2500 年ごろを境として屈家嶺と区別する。この都城は南北 1.3Km、東西 1.1Km という大きさを、上述の黄河流域の部族と抗争したのはこの頃と考えられる。

河姆渡文化： 浙江省余姚県河姆渡遺跡。紀元前 5000 年? - 紀元前 4000 年? 下流域では最古の稲作。狩猟や漁労も併せて行われ、ブタの家畜化なども行われた。

馬家浜文化： 浙江省嘉興市馬家浜。紀元前 5000 年? - 紀元前 3800 年? 河姆渡文化を継承、発展させた。灌漑が行われ始め、紅陶が特徴。

崧沢文化： 上海市青浦区崧沢村。紀元前 3800 年? - 紀元前 3500 年? 玉による腕輪など、装飾品が作られ始めた。

良渚文化： 浙江省余杭県良渚鎮。紀元前 3500 年? - 紀元前 2200 年? 馬家浜・崧沢を受け継いだ。多数の玉器の他に、絹が出土している。分業や階層化も行われたと見られ、殉死者を伴う墓が発見されている。黄河文明の山東龍山文化とは相互に関係があったと見られ、同時期に衰退したことは何らかの共通の原因があると見られている。

呉城文化： 江西省清江県（現在の樟樹市）呉城鎮。紀元前 1400 年? - 紀元前 1000 年? 黄河文明とは異質な青銅器を特徴とし、原始的な磁器なども出土している。

四川文明（古蜀文明）

宝墩文化： 新津県龍馬郷宝墩村。紀元前 2500 年? - 紀元前 1700 年?（龍山文化）新石器時代の城壁で囲まれた集落が成都平原の岷江扇状地に複数存在した。最大の遺跡である宝墩遺跡は 1990 年代に発見され、発掘が続いている。

三星堆文化： 四川省徳陽市広漢県南興鎮の三星堆遺跡に代表される。紀元前 1700 年? - 紀元前 1200 年? (夏晩期～商後期) 大量の青銅器が出土し、前述の他に目が飛び出た仮面・縦目の仮面・黄金の杖などがあり、また子安貝や象牙なども集められており、権力の階層があったことがうかがい知れる。青銅器については原始的な部分が無いままに高度な青銅器を作っているため他の地域、おそらくは黄河流域からの [独自研究?] 技術の流入と考えられる。長江文明と同じく文字は発見されていないが、「巴蜀文字 (中国語版)」と呼ばれる文字らしきものがあり、一部にこれをインダス文字と結びつける説もある。

最後に、図 B2.19 は地中海沿岸と欧州で、欧州北部を大きくしたものが図 B2.20 である。

西欧で青色が目立つ欧州の北海沿岸を見ていく。

図 B2.20 で中央やや左の大きな青い部分は、ライン川河口からエルベ川河口に及んでいて、ベルギー・オランダ・(西)ドイツの海岸部である。

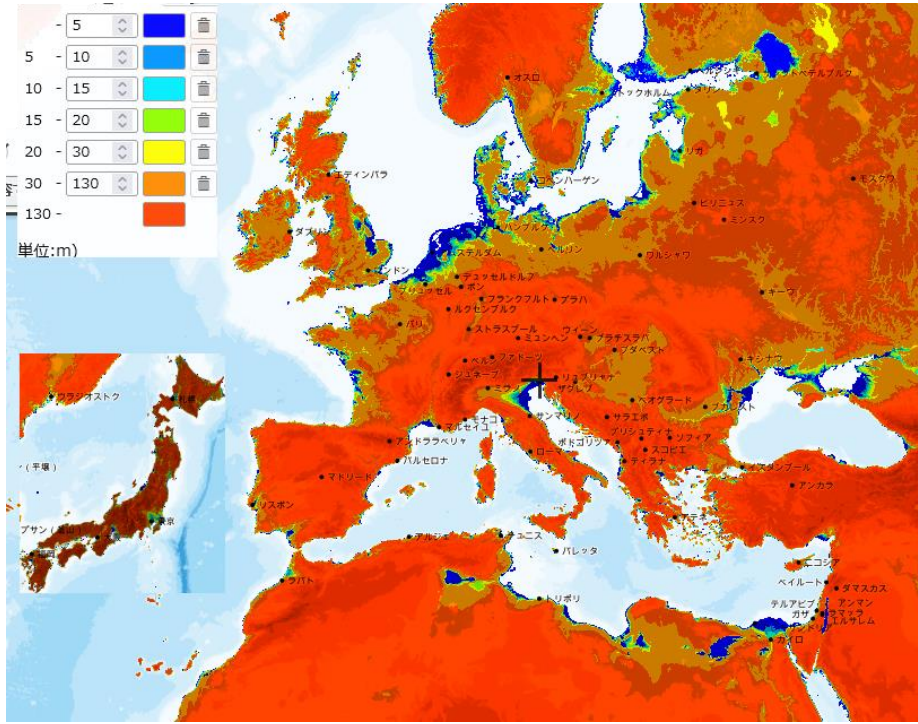


図 B2.19 縄文海進と地中海

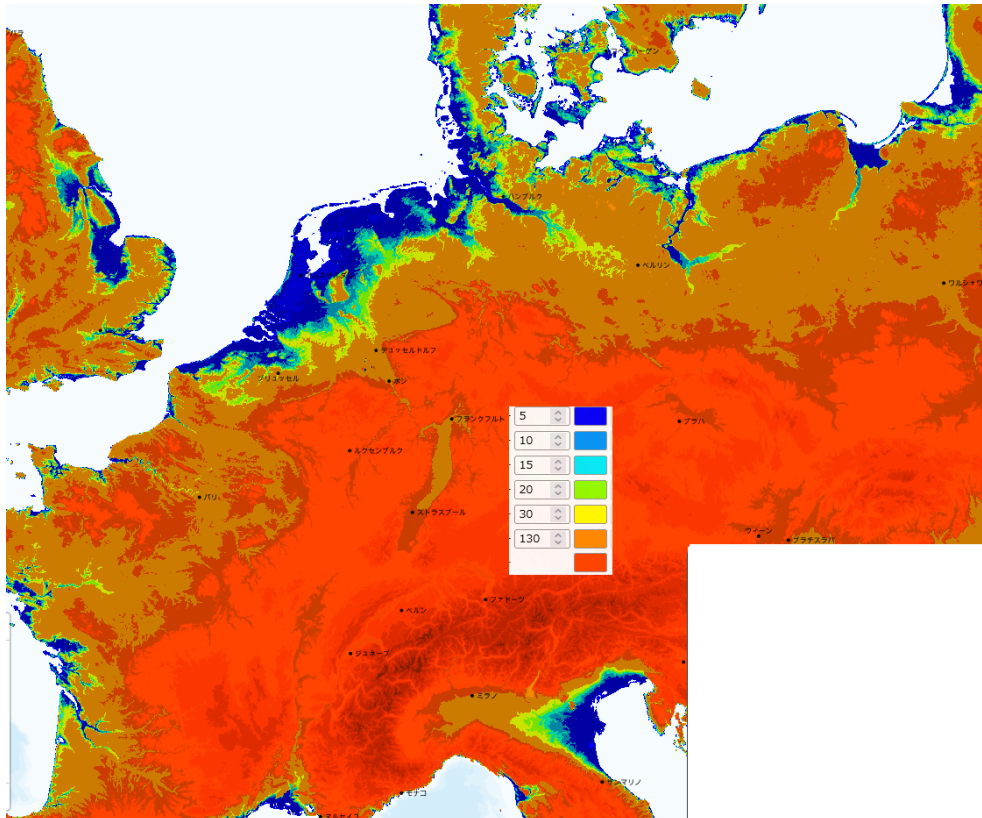


図 B2.20 縄文海進と西欧北部

青色の部分を見ていると ‘ハンザ同盟’ が浮かんでくる。

世界史の窓＞ 5章 ヨーロッパ世界の形成＞ 3節＞ 「都市ハンザ」に書かれている都市は次である。

リューベック・ハンブルク・ブレーメン・ロストク・ケルン・ガン（ヘント）・ブリュージュ・

ヴィスビ（スウェーデンのゴトバルト島）・ダンツィヒ（現在のポーランドのグダニスク）・ケーニヒスベルク（現ロシアのカリーニングラード）・リガ（ラトビア）

このうち、ヴィスビ・リガは図に含まれていない。ケルンを除いて、青から緑に移る部分、標高 10m 辺り、に位置していると思われる。さらに、グダニスクを除いて、海岸線にはなく、ライン川やエルベ川などの川を遡ったところにある。日本でも、日本海沿岸の古い都市は、山で距てるか川を少し入った所にある。

5章 3節の用語リストで定期市が開かれた都市として次が挙げられている。

マインツ・ケルン・ニュルンベルク・アウクスブルク・フランクフルト・マクデブルク・ノヴゴロド（ノヴゴロドは図外）

海進の話とは関係ないが、ローマの遺跡としては、Wien とルクセンブルグ近くの Trier とが、筆者の知る限り、東西の北限である。

最後の最後に図 B2.20 の等高線の区分を変更したものを掲げておく。

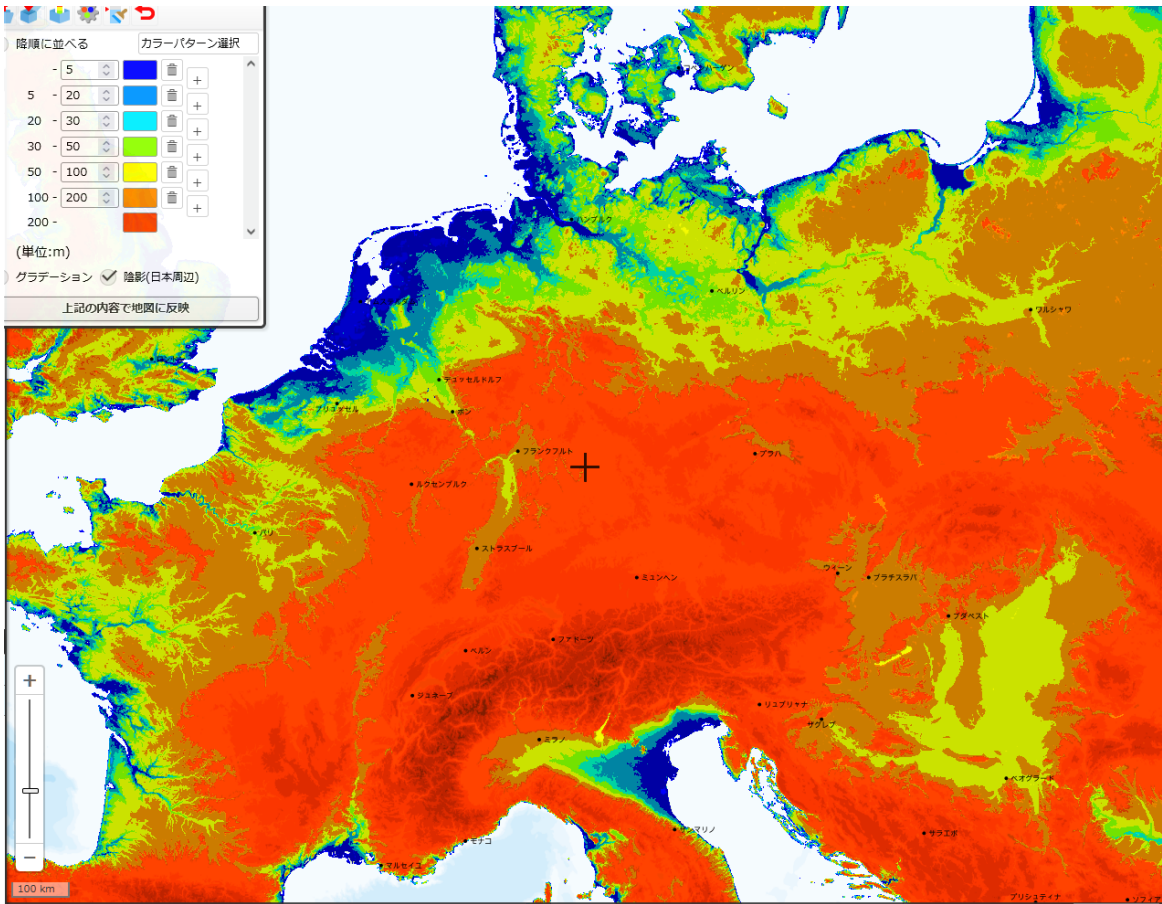


図 B2.21 縄文海進と西欧北部改

あとがき

本章では、釈迦の足跡遺跡を介してことで大雑把に見た。また初期施設について感想的な観察をした。目標は石仏(=仏像)の起原を知るためであるが、寺院についても興味あった。

縄文海進を調べている過程で、地理院地図に‘自分で作る色別標高図’というアプリを見つけた。区切りは5m、10m、15m、20m、30m、130mとして、四大文明の地域の地勢図を作った。また、各文明に対し、その遺跡分布図を見つけて並べて置いた。現状では、四大文明の遺跡は30m辺り、図では黄緑とベージュの境目辺りに多く分布している。

最後に、地中海を取り囲む図と西欧北部(北海とバルト海沿岸)の図を掲げた。後者は色分けを変更した図も作成した。

地勢図に主要な遺跡を書き込めれば良いのだがこれにはかなりの時間がかかる。地理院地図には‘+’の位置の緯度経度表示ができるので、遺跡の緯度経度がわかれば正確な位置決めが可能となる。この方法はより正確ではあるが、手間が掛かりそうで、簡略な簡単な方法を探っている。